

泥棒に一冊の書物を  
與へた寄宿舎の少女

永代美知代

それは私がまだやつと十三か四か、關西のさる宗教學校の豫科生時代の事です。

ですから、もう彼は一昔の上にもなりますし、何しろ學校一のベビーさんで通つてゐた程のあばれやで、ぼんやりで、丁度何年何月何日の出来事だと、さうしたハッキリした記憶は御座いませんけれど、何でも日曜日の、舊天長節過ぎの、薄寒い十一月の事でした。



午後十時就寢のベルが鳴ると、寄宿生はみんな大急ぎに寢床の用意をして、それから三十分後消燈のベルが鳴るまでには、もう罪のない軀を立てゝゐるのもありました。それもその筈、宗教學校の寄宿生に取つて、日曜日はど忙しい日はありませんもの。

他の學校と違つて、土曜日には學課を休んで、自由に出出を許され、肉體の安息日とせられてあります。代り、日曜日は靈魂の安息日として、寄宿生一同、病氣とか何とか相當な理由の無い限り、どうあつても教會に出席しない譯には行きません。ヤレ日曜學校、お説教、お部屋集り、同級生の祈禱會、共勵會、傳道會、慈善會と云つた風に、朝から立つつけの集會で、本當に息もつけない有様です。



おまけに夜は夜で、宣教師の客室で讃美歌の會だの、祈禱會だのがあり、美しいピアノの音色に合せ、私達下級生には譯も解らない英語の讃美歌を歌ふのですから、頭も疲れます、體も疲れます。

ぐつすり寝込んだ眞夜中頃、ちつとやそつとの地震が揺つて處々の戸障子が倒れた位では、目の開きさうにも思はれない連中ばかりのお揃ひですが、どうした事か、ふと私の目が開いて、ことくと戸を打つや



うなもの、響に耳を立てました。こと、こと、こと、こと……こと！

『如何したんだらう？ 風かしら？』  
私は一人で怖くなりました。

『まさか鼠ぢやあるまいし……』  
怖々耳を澄して聞きますと、又もことく、憚るやうな、それでゐて何事をか訴へるやうな調子で、音は如何やら入口の扉らしい。

開けたものか……開けて、もし強盗か泥棒か、さうした曲者だつたら如何？

私は思ひ惑はすには居られませんでした。

こと、こと、こと、こと……こと！  
音は次第に強く烈しく、いよ／＼私の神經を亂して響きます。

『田中さん、田中さん、一寸田中さんてば！』

私は忍び音に室長を揺り起しました。

『え、何よ？』

室長と云つても、まだやつと二十歳に足らぬ田中さんが、眠さうな眼をこすつて、不思議げに訊きました。

無論部室の中は眞暗です。ゑたいの知れぬ戸の方を憚かつて、私は電燈をひねる事すらし得ません。

こと、こと、こと、こと……こと！

『それね、あれですの、先刻から叩いて居ますのよ。』

『開けたら可いでせう。』

『だつて、だつて、もしかして泥棒だと怖いもの……』

『馬鹿な！』

云ひながら田中さんは電燈をひねつて、戸口に進み、そつと開けながら様子をうかがひました。

『オヤあなたなの！ 如何して？』

田中さんのその聲を打ち消すやうに、そつと入つて來た人は、戸口を自分でしめて、

『電燈を、早く電燈をお消しなさい！』

『え、え、どうしたの？』

『シッ！ 今ね、二室へ泥棒が來てるのよ。』

『泥棒が！』

『二室、二室だと直ぐあなたのお隣りぢやなくて？』

私と田中さんと、兩方から周章て、訊きました。

『早く舍監に知らせたいと思つてもね、丁度二室の前が階子段だから、下へ降りる事が出来ないの、それに聲を立てゝ可いか悪い、それも考ものだしね、私の部屋では皆なもう生きた氣はしないのよ。』

『さうでせうとも、すぐ隣りぢやね、此室だつて何時どうなるか知れないけれど、いつその事みんなで逃げてらつしやらない？』



『有り難うよ、ぢやアさうさせて頂戴な。』  
隣の部屋の黒川さんが、急いで出て行かうとする途端、

『アッ!』と魂切るやうな聲がして、續いてドシンと高い處から物の落ちる音がしました。

『聲を立てゝ見る、命は無いぞ!』

疑ふ餘地もない、泥棒は早や隣の三室に進んで來たのです。

『どうしませう、私……』

黒川さんは殆ど倒れやうとして、僅かに身を支へながら、両手で顔を蔽ひました。

『もう仕方が無い、眞山さん、騒いぢやいけませんよ、静かにしてね、みんなを早く起して頂戴。』

私は室長の命令を受けて、わな／＼震へながら、そつと同室の誰彼を起しにかゝりました。

『え、泥棒だつて? た、たいへんだ!』

周章で、騒ぐのを一々取り静めながら、私はみんな一處に固まつて、息を殺して居りました。

と、急に泥棒が怒鳴りました。

『おいこら!、貴

様達四人の筈だが

今一人は何處へ行

つた?』

『いゝえ、私達は

三人です、初めか

ら三人です。』

誰かいおろ／＼

聲で誤魔化さうと

する。

『嘘言を吐け、寢

床も四つある、机

も四つある。おい

こら、今一人は何

處へ行つた?』

黒川さん一人拔

けてゐるのに氣のついた泥棒は、やつぎになつてそ



の所在を聞かうとする。

『まだ何かあるだらう、出せ、出さないと結句ため

が悪い。』

『いゝえもう、それつきりです。』

案外サツバリと落着いた其聲は、芝さんと云ふ本

科一年生です。

『まあ芝さんが!』

誰の心も、その大膽さに驚かすには居られませ

でした。

抜けるほど色白の可愛い顔と、巾廣のリボンで蝶

蝶に結んで房やかな黒髪を後に垂れたその可憐な姿

と、誰が如何して今夜の態度を思ひ設けませうか。

『よし、ぢや行李はこれつきりとして、時計は何處

だ、財布は何處だ?』

何處までも悍猛な調子です。

『どうぞ御自由に御覽なさい。』

カチャカチャと本箱を開ける音、机の引き出しを

開ける音がして、壁一重隔てた私達は、どうなる事

かと、たいもうおろ／＼するばかりです。

『何處に居る、そ

の蒲團をまくつて

見せろ!』

『其處には居ませ

ん、先刻あなたが

隣の室にゐる時

そつと出て行きま

したから。』

芝さんがまた落

着いた調子で云ひ

ました。

『ナニ、出て行つ

た? 何處へ? 何處

へ?』

『多分舎監部屋だ

と思ひます。』



憎々しく怒鳴ると一緒に、泥棒は室内を出かゝりました。芝さんがそれを呼び止めて、

『あのもし、まだ大切な一品が残つて居りました、是非持つて行つて頂きます。』

『大切な一品が？何だ、小ぼけな本ぢやないか、俺アそんな本なんかいらねえや。』

『ですけれども、私からあなたに差上げたいのですから、是非どうぞお持ち下さい。』

『フン、馬鹿に度胸の好い娘だな、ぢや折角だから貰つてやらう。』

泥棒はのさり／＼と出て行きました。

芝さんが泥棒に贈つた小形の本と云ふのは新約聖書で、極悪非道の泥棒もそれによつて神の教を知り真直ぐな人の道に立ち歸る事もあらうかと、やさしい心からの贈物なのでした。

その翌日から寄宿舎も講堂も、寄ると觸ると、芝さんの話で持ち切りで、今度泥棒が入つたら、是非あゝ云ふ風にしなればならぬなどと、中には泥棒

ごつこのおけいこなぞする人もありました。

その後二年経つて、私達寄宿生の記憶から、不気味な泥棒一件もはゞ忘れられた時分、ふと斯うした噂が傳はりしました。

神戸監獄に囚はれた一泥棒が、新約聖書の差入を願つて、それによつて非常な善良な人間になつた。

そしてそれは二年前、某女學校の寄宿舎を襲うた時、一人の少女から與へられた書物の名が、新約聖書であつた事を思ひ出し、急に讀んで見たい氣になつたと云ふのでありました。

(なほり)